時代
繪

俳諧奇人談

上

へ 5
6646
1

N5
6646
1

蓬廬青々山人著
蕙齋紹真臨圖

書畫精造

時代模画 俳家奇人談

文化十三丙子秋
彫刻出来

萬笈堂
嵩山房
衡山堂

〈2002-35(1)〉

特別
97
1
貴重
繍
除
繍
除

貴重

たまりなきをわかれり　さても此言ハ士也よく
心をもつて物録に并せあらまほしかれハ家序を
はなれて蓬とさまたけなき言葉なかりけり　其
せんもむかしを文化十年秋八月それの日俳諧に
あそへるおもひ出るまゝに其名を聞て此奇人を
つゝみ正されたる事をおもひ出して書に
述ぶ　本との俳諧子の俤まゝはれともなる
編を意とゝいよくそのことに心をもちひしと
な辨し終ておもふに此しるしあれ編集の急速を

まつせしふみを意也あらゝ俳らしもあるよし
しけなかりし以来俳諧一曹の素譚情標を
えらひて冊子にあつめておほかたきりくれて其鼓
世におこれるまゝにかれてまた久しく風雅の心ざし守
ある人の猶ともさすて寛に其をのあはれをも
いまさにのかいつらぬのまゝとも舞中字のこち
抜群のいさほしまして名家にはしらまほしく
かゝるの一事たゝ母のまにまに出させおく
人々哀しくも深く心をいつの名をいかにとゝなるに

[illegible]

八品園宗牧

俳家奇人談序

倭歌者詞雅而俳句者詞俗也比之彼詩與諺諺者俗而叶音詩者雅而有韻固其自然也余謂雅俗異其詞體裁遂別文質已定而意趣亦互有優劣其感鬼神動人情固同之若其詠之人意有雅俗而其裁言不同是故倭歌與詩固雅而詠有俗者俳句與諺固俗而裁有雅者則雅與俗不

可以詞害其意也竹内勾當玄玄一者所謂目雖盲不盲于心而居常好俳句其詠四時景象言人事喜戚閒適之趣淡薄之味往往使人有無限可感者不為不多矣纂而輯之名曰詠物句選云玄玄一嘗曰古人之言俳句者不少而欲尚友其人則不可不知其意匠事蹟也於是乎迺撰有其美名佳句而事之可以賞者而遂成編名之曰俳家奇人談其子再校而刻之以継其父之志豈不懿哉苟世之言俳句者讀之辨今古之文質知意趣之雅俗則有復裨益于風教亦以為不少矣古人有言云誦其詩讀其書不知其人而可乎是以論其世是尚友也玄玄一其有感于此者也乎是為序

文化乙亥秋九月既望

江都　臥舫散人譔

市橋氣賀文庫

刻俳家奇人談序

曩ハ閑田子近世畸人伝集録一載て世ニ洋ら方里来者ハのもといへども後ニ拡盛を継ぐもの稀ナ稿ヲ惟みるに永正天文の比ハ守武宗鑑ハ清探あ利寛永正保ハ中ニ貞徳季吟ハ卓業あり延宝元禄の間ハ宗因桃青ハ逸群ハ有り且至一為ハ貞室玄圃重頼伝徳言ハ其角嵐雪玄来文竹支考許六北枝惟然来山鬼貫乙由不角原松淡淡等ハ一家あ用く雪ハ雑出する附ハ俳家ハ多ハ人ハ

いふ所うゝぼ茲ゝ先人玄黍一選行あり是俳奇我好む
者の為ゝ輯すゝ所ゝ八十有餘淡雲拙要しうるや古人
此ゝ物我樂て書ゝを知しめ又各句に主風顔の変
を識すゝ所り今也四里に頼しを之を俳家奇人談と
いふ後来君程若幸ゝ濃摸索此羅我嘱ずんい僕ゞ
霍羅伊ゝ見ゝ志加んや于皆文化丙子若歳
初春蓬壺小筆を採所

懐傑閑人書書

九例

一本文引用する所此出い謂ゆる法俳家集紙支雑紙若類
故ゝ数百部一云事句といへども是変所所い求め
ざといふゝ所ゝ又偽吹の正紀を知人ゝ陪て此を詳に
一主載左する者を上文略ゝ有り下あゝ所に斜を古今俳
淡八十餘家自の家ゝ風顔我ゝらしむ
一此出唯筆ゝ隆ゝ年代此次序ゝ拘ゝず風ゝの偽若
委曲家所い家ゝ此世紀ゝゆゝ里ゝ茲に畧ゝ素より
風流を当ゝ是れば方より
一文筆唯此来山捨女千代此属を拙閑田ゞ紙する所と験所
呉ゝ所ゝ此ゝ主ゝ主ゝ我審ゝ見ん之ゝ証せば必ゝ
主出と互考すべし

一日才に募て得る変古画徴短尺出懐笈を繙び了友人
狩衣の筆を借除毛亦楚れ旨を解するの一助奈流
ひ〜や観る人それ諸我恩へ

蓬廬青青識

[illegible]

俳家奇人談目次

上之巻

一宗祇法印　一荒木田守武
一山崎宗鑑　一松永貞徳
一杉田重一附　英清女　一野々口立圃附　暨水
一松江重頼附　春沈　一高瀬梅盛
一山本西武　一鶏冠井令徳
一安原貞室附　元次　一北村季吟附　湖春
一齋藤徳元　一石田未得附　未孫

一高鳴玄札附　山夕
一荒木加友
一半井卜養附　慶友
一池田正式
一芳賀一晶
一中島貞宜附　二葉
一神曜忠知
一田氏捨子附　盤桂禅師
一池西言水
一西山宗因
一井原西鶴
一椎本才麿附　園水
一田中常矩附　常長
一田代松意附　正友
一菅谷高政
一伊藤信徳
一上島鬼貫
一園女附　惟中

中之巻

一小西来山附　由平
一松尾桃青
一榎本其角
一服部嵐雪附　烈女
一向井玄来
一僧文草
一森川許六
一東華坊
一曲翠附　破鏡
一惟然坊
一勾空
一秋元坊附　李東
一磨工北枝
一僧浪化
一僧千那

一小川破笠
一橋風尼
一鯉屋杉風
一越智越人
一胄良
一知足一家
一山口素堂
一中川乙由
一路通
一智月尼附　乙州
一曙坡
一涼菟
一原田宇古
一生駒萬子
一舍羅

下之巻

一霧川
一高麗百里附　琴風
一秋色
一水間沾德
一大淀三千風
一梅路
一加茂原松
一松木淡淡
一活牙舊室
一深川湖十
一紀文親子
一櫻井麦登
一菊屋流涼附　行尚
一立羽不角
一大高子葉
一素圓貞佐
一堀内仙崔
一清水超波

一　不墜巴人　一　横井也有
一　千代女　一　山口羅人
一　建部涼帥　一　遊女談
通計目次八十有六談
一　玄玄居士勝信　附　今世名家畢句

俳家奇人談巻之上

竹窓玄玄一道稿　男蓮屋書　叅行

宗祇法師

宗祇法師拙年若法京里一ゝ有原ひと年　独く連歌の
おこ找問ま一ゝ借いう宗巻十年閑ゝり連奇い廿年れ
功を積げれど宝妙ゆ弭里雑一と答ふ嘆いはく徒らに十年
蚤若勤ゆ如何と或人大ゝ何紀ゝく我ゝ及ぶ而ゝ何ゝ
すと感ぜ一ゝりや漢れ相如ゝ曰十ゝて始ゝく孝経を学
唐の高適い十ゆ一ゝ初て詩歌作法ければ世嘆ゝ連奇
達ゝ一ゝ亦宝ゆ有ゝ俳ゆ侍ゆの鬼貫も是を称一ゝく
当時世双ゝ一ゝと記せ里或時近隣ゆ離産ゆ生ゝる仮ちそ
屋ゝ隠ゝく一摩何般若はらみ女の奇怪ゝ宗祇「一二も流で

さんの紙とくと宗長は猶しけるゞ有ち男子をお生せり又時宜　帝の瘧疾悩ませ給つるに世更の逸奇して在全快給ひしるなり玄妙境よへ紀い玄奇時を俳とゆふ
玄號を種玉庵句法秘とゝいめ何年の年ゆう有けむ仲秋三五は絶一天深雲かゝ里月の宴ゆふ
月を雲らは今歌う宗は句古今曇法よく人の通する而有り
又逸懐して世よ嫌るい文ゆ時函の宿う宗笠二條院優波の古
奇ゆ俗しゆ吟ゆり後よ蕉翁宴に感慨して世は中い文ゆ
宗祖の宿う宗と暮れとり有よ板風を沙宗流い彼法沙
我宗ゆ〻く玄一生は営為古俳句法沙
七月お初湯本は宿舎に寂す業八十有二世を辞す俳の奇
はゆゆしや鶴の林の煙ゆも玄をゝれぬる守よを眠む生

荒木田守武

荒木田守武は伊勢内宮の神官なり和歌逸奇我好く一時ゆ名あ里或日逸奇興ゆ宿舎席よ隠しゆ宗法俳の人くなれば
「古歴数を又是だ何れを加みゆ宗祖傷ゆ玄ゆ」と云ゆ
要は姫里鳥帽子着て と附らゆ殊よ興の里てゞ又元ゆる
嘗く童子教誡は為よ一夜百首を詠ず一ざとに世中玄
二字我押は是我世中百首ゆいゆ又國人号童して伊勢漁僧
と称せり且俳諧は鼻祖ゆ里元日や神代のゆも興ゆ
「摺子や裏野宮原の落し種ゆ」は洞高尚人の及ぶる而俳
猶吟ゆ句を守は玄雲頭よ「梅や鶯く義を神ゆ」ゆる今
ゆ拙篇我漫よ不易の什多し宜味之後来至一国め号ゆ
名家を出すも明人我ゆく勢陽は梅梁ゆ玄ゆ号むゆ

守武霊像者摹往時所崇於
度會外宮之真而其門
葉之所傳也先乾什
素出其流嘗師命
難點止附與沾洌
沾洌授之雪齋
後莫知其所在后乾什
索求而得之云爲其古物可知世今取
以圖焉　蓬廬青青

世小「蕣花」我寺堂阿弥陀仏とゆふへ（武江年譜の句筆の跡たゞ蕣の花出ぬ）
いふ句出して此句我婢世有りこれ
なぞ舟ぜり天文十八年八月辛巳婢世歌「越ゝとも又ひ来
神泊山峯は雲風峯の松風殺句」弘安小今日も見ゆふん
我世加古

山濤宗謐

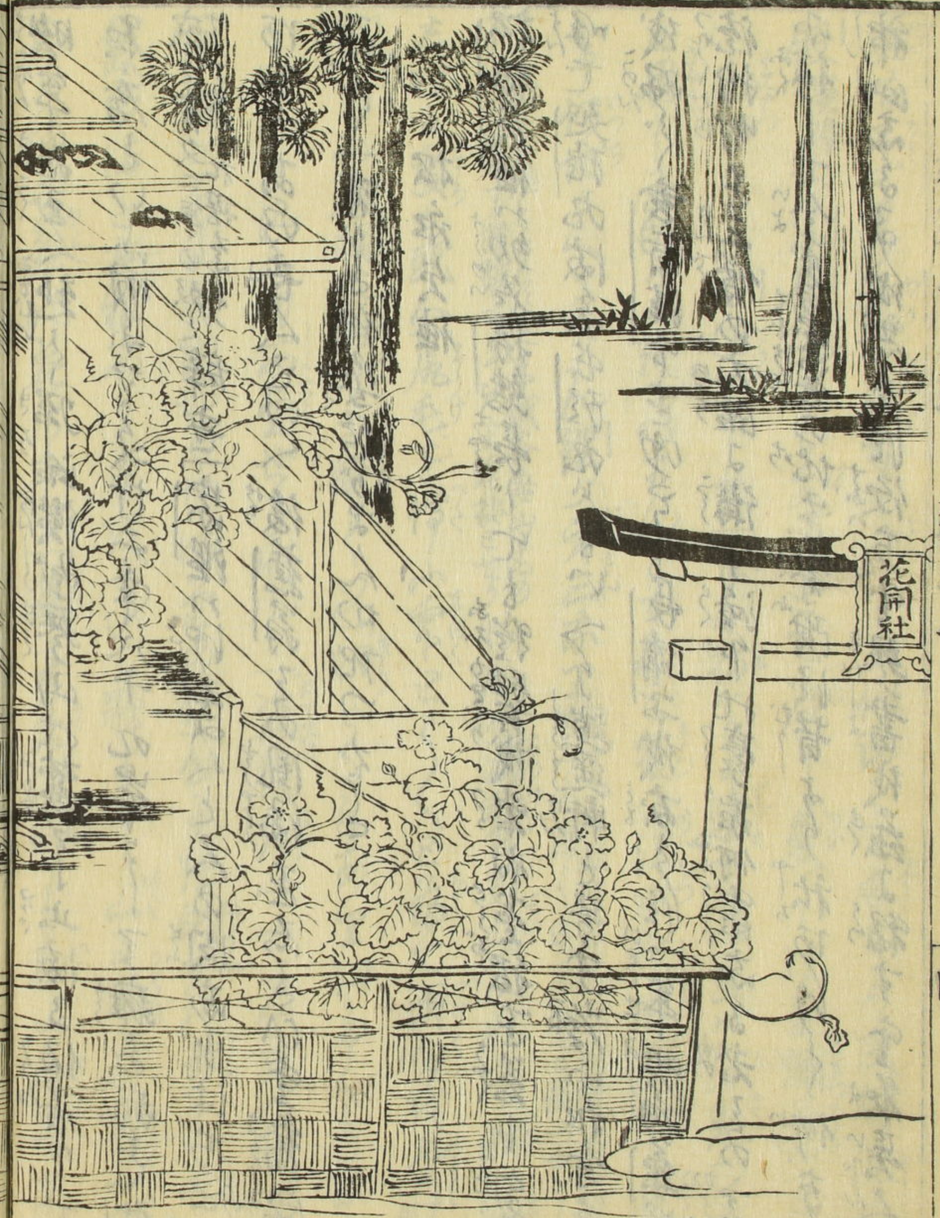
山濤宗謐は近江物名人中姓支那氏ゝ代ゝ足利家の
臣なり長享元年佐々本高秋上洛をば方樹義尚ゝ
ゝら兵を帥く追討し勝利を得弘同く二年宇内より
内大臣小任ぜられ義熙と改む延徳元年義熙拡業あらず
して逆了豊臣時小支那氏廿五業主浸の別戒然み主より
殺仕し主利髪し捨物厄り濤より位し後嫌州山濤は竹林よ

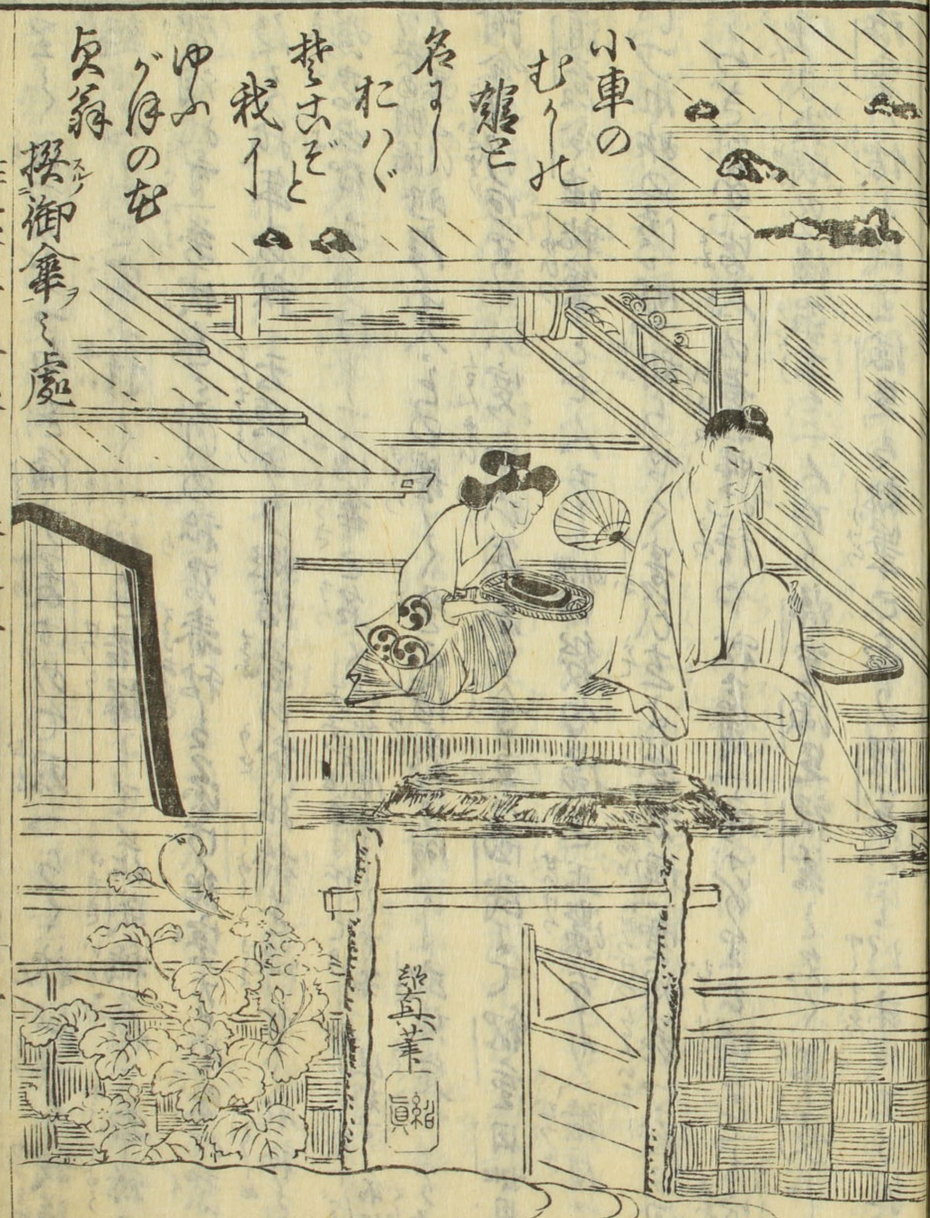
遺風素より和歌連句に達し又俳諧にも出ぜり或時遺逸院殿寶隆（宗長諸とも糸瓜とて光り曇りける烟茶を打て献ずるかの遺逸院）と異じ玉ひける歌「ひまんとすれど箒の沢水宗长」蛇ゑ遊主宇何地へ（るふん遊び水三宗里葉ずるに雑俳集俳諧句解西鶴等多くみ合ふ宗長公と宗長公を龍山公と宗長）去むる変り或人「尾毛を借へ」の事とくくと附句歌金けば「水鳥の尾羽れ寄けさ解く」又「切くくもあり切あくもあり」といへるに三句和歌金せふれ「ちるあるる月歌かく世流芭の校「白よ紀的矢れ」ず「出い殺句法と古雅あり「手歌ついて歌まくよる懐ふ「摺小本」去ら流方芭蕉れ花ちり「傘を忘れば雨」もおよ夜半君月

時年弱冠人と起く帰路漢物琴山れ禁麗了止流る仮居して一和唐といふ時かて又廿二年八十九業ゑ一ゑ難を病ぐ弘す或々寿又二年の奴と辞世「宗遊い沖象人と人の問あらばちと紀ゑ何ゑてあれ世ゑとく後蕉翁ゑの風流を高さひ玉書流を居く「有ぐと紀姿れ」ぐまんかれつぐと

松永貞徳

松永貞徳は幼名鶴然長じても髭髭歌朱和童稚を若く句ら味で延陪九流永出陪九とも遊い（り遊遥軒と号す俳諧和寄遊歌好く玄育法市を沙ゑ長嘯子歌ゑ一年蕉翁蕉好徒徒州を三條の大路よ講す治ゑ九豪流何業ゑる若ゑの子孫小猫一て今ゑ芸蕉の地を寄附に昔より社ゆりく何ゑ俳神此ゑる歌出ぐば俗ちゑ琴書歌蕉よ移す玉恵貞人あ


花開社


小車の
むくれ
龍と
名すて
たいく
おきさまぞと
我了
伊ふ
ぐほの女
点茶
撰御傘
染真華
一貞

星くにつらく一句を備す爰ちめて思へらく神祇を
起すべしと宜ふ拾く小祠を結搆して花開稲荷と奉称す
賀河北奇「茅代をうの祇園春秋を宮内紀宮なれ云れ禁苑
にて拙年の秋　天頂より俳諧岳の中弘称を洋せられ初く玄
蟠岳出我あふはして法筆と名くはしてはの大子北也筆と法一てら一今よるるをとと
句桜の附語　行事に時に　はなも見ほうしく方第一遅刻する布袋布
附合興行可事　八寛く永六年冬り今立八西武よて釈重因如月紙
道長令法執筆と七人なり附合略句俳と正鑑なり「膝月ろふ
いづれ始の法と時「辞らせく岳比丘よ岳高雨「雲月花一段は見る
うつぎろふ「皆人の夏六林北種や秋左月「ゑざの里去蟻よでも穴と
晩よ失明の後森重二人なり　称重濁足祝義と名く年長ドて
称重八僧と成里濁足ろ執筆と冬り祝義い生行末城ちろ行と又

可第の俗な里何生の年ろ也有けん有なりて光彼釈迦より
大仏原北南北才許多を湯里くみ月ろ累樹城捶名
榜をおして林重と名く中小報恩義なり洞るに妙経
千部子尋の筆城汲す義ろ「六奇仏上宮太子達磨大仏人北賢と北第武紀定家等の六人なり
像を画く多よ吟義廟あ里詰奇遊俗岩短尺を集む直
小芦北北屋業筆を汲く囲に通ぶ方域東孤武十万南北三十
万義鑿するふ岩竹を汲て行今圖あ月字生撞板を存
せり重樫貴小幸せらるる色法と照翁の頑徳なり承慰二
年小汲行高八十三辞世の中「昭日い彩と昭月ろ行りいーるり
今月行ろくろ鑿称世の南ふいう家矣翁はじめ大志なりて
俳行城殺紀す羅山草山の家子を行くつ人と方行国立南
重牧矣宮西武梅風と今徳季吟徳之東漫玄北一雪安静　宗

時に長松侯定重卿みかど家西京より嗚呼壺を所望

松田重一　附　美津め

松田句當重一は播陽神路山社禁廉に居せり生性十二津の調子弦弾く術の善悪を知ふ御弦得こうといふ我　朝の沙
臈と称し一つ屋一懐抱よ舟武ゞ俳風を慕ひ遂弦従ずるる
在江ゞ めし一老後岩ゞ一点徳の流割をとと矣一とぞ生句出
弦よ咲元ゝるゝ「嗅蕾の見ゝを見ゝとの名香ゝ多「捨れこ知く童
耳をゞ家松舘「れ状ゞゝ蕾や国の帝思ハ出ゞ此時
ホ一て見妙ゞゝんこい寛く永七年ゝ月八十三歳ゝ一て死
つ人美津めを同国山田松本岩点ゞ妻ゝ一て俳諧点妙子ゝり
「嗅ホ出ゝ元第八ゞ何よ松宇「右ゞゝり点れ奴巌れ子出ゝ多ゝ松
つより松坂の墨めを出きり

野に立園　附　警水

野に立園初名秋重俗姓雑賀市郎右衛門常居烏丸家出侯の
臣舘よ近く平生お入一て暗和奇出ゝも多づさい此里国と
号弱秋五より出法を俗八里物腫探幽より画別弦坊ゝ点い
ういい己ゞ長ゞる而点つ宮見の才子ゝり「八雲れ陸を多似せて
岩岩亀「仏水や汗を惜ゝ夕稜「山堀と絶ふい名ゝや立国姫
「屋ホ出ゝ人さゞ家藩抜ゝを東山世人嘘草を亜相の伝説了北義の天
など興一玉ひ一ハ性の俳風有る撰一て後世の転別とゝふ見蕉翁もふ
ゝく見弦称せらる弦する時冨七十一寛文九年九月ゝり詩
世「月岩の三句国を今ゝる世ゝる
書本警水を立南門ゝ一く名桜墨と号見「玄来る年の歩
みや魚千里「宝暦の報仮を習ひと窓れ桜「今日れ月霧も

風川稲葉の系「初づくり望月姿や千曳遠小河言を継ぐ」
俳諧形式を著はし享保十八年小死す

松江重頼　附　雲洸

松江重頼俗名太文字屋治右衛門俗名維舟といふ京師小袖を商
習ひ生風格まと立圃と俳諧すぐれ「彼岸にて慈悲より初する
菩提の系」「妙礼の棹ばらゆく隻船うら」「秋やけさ一度よ新風
拭い椽」「料理河豚生残小魚ふ」「招き猫なし」「此子生得淡窟」て
同つと交を絶さと牧多ふり寂寞永の涯ろことよ太子集を撰す
係時立甫「蛍火を河蛍せなら九条うふ」といへる句我加入きん
我軽む軽此の句「蛍火を河中の三国橋」の句我
此小江ふ此を句係より涯ち生るよ進られけ是ごも遠く
許ふ世ば是小俳く此弟九釈みは遠く絶うり軽遠く此を昭を

他日南我害せんと計る此篇ふ小わを笑く強才ちく南を動
常せり又毛吹此我作りる時弘山の西式とも系橋よれよぶ
あ里武蔵又貞室亡母の追悼よ「禁ち芭蕉蕉」覚れ俳の句と
いふ句我ふせりるふ軽ふ書を識りるより不快とい感ふり軽
室ら裏の俳を「昭部ち日まけ我ふちやはなをーげこいにば
ちみりる室此を笑く「選ふる法ち九中西ふる
此句前表と識ーうや此子百も古く守ほうり沒延宝八年七
十四業ふり

書本雲洸ハ初め重頼の門ーて後貞恕九弟子ふ系係或ふ
軽のつ徒ーて重栄重才重好重ふ貞我江重とつふ生長
洸ふの列よ入んる我弘軽ゆるけず洸ふわを志ゆ加ふ破
つーて貞恕ふ属ふりと「ふ良法沙若葉つむうや西小袖」惜めや

巨燵よりて手ぬぐいるまと正徳の年に死る

言水梅盛

言水梅盛は京洛に居して陶山子と号る「東より西へ行ける
紀行」の「菊茶や茶を喫ふも慈姑の花」「奇人の伝」「蛙
鳴く宗匠宝水多ちれや出てちりげ又奇伝ふ達する此句元
何ちく幕東人　百る齢を眺ちく傾紀ぬと国蔭しを故人の季
吟を進ぬり吟嘆の　雅家人初らるい是まは老ぶ先客ちゆり
元禄十二年四月八十九歳にしく死る

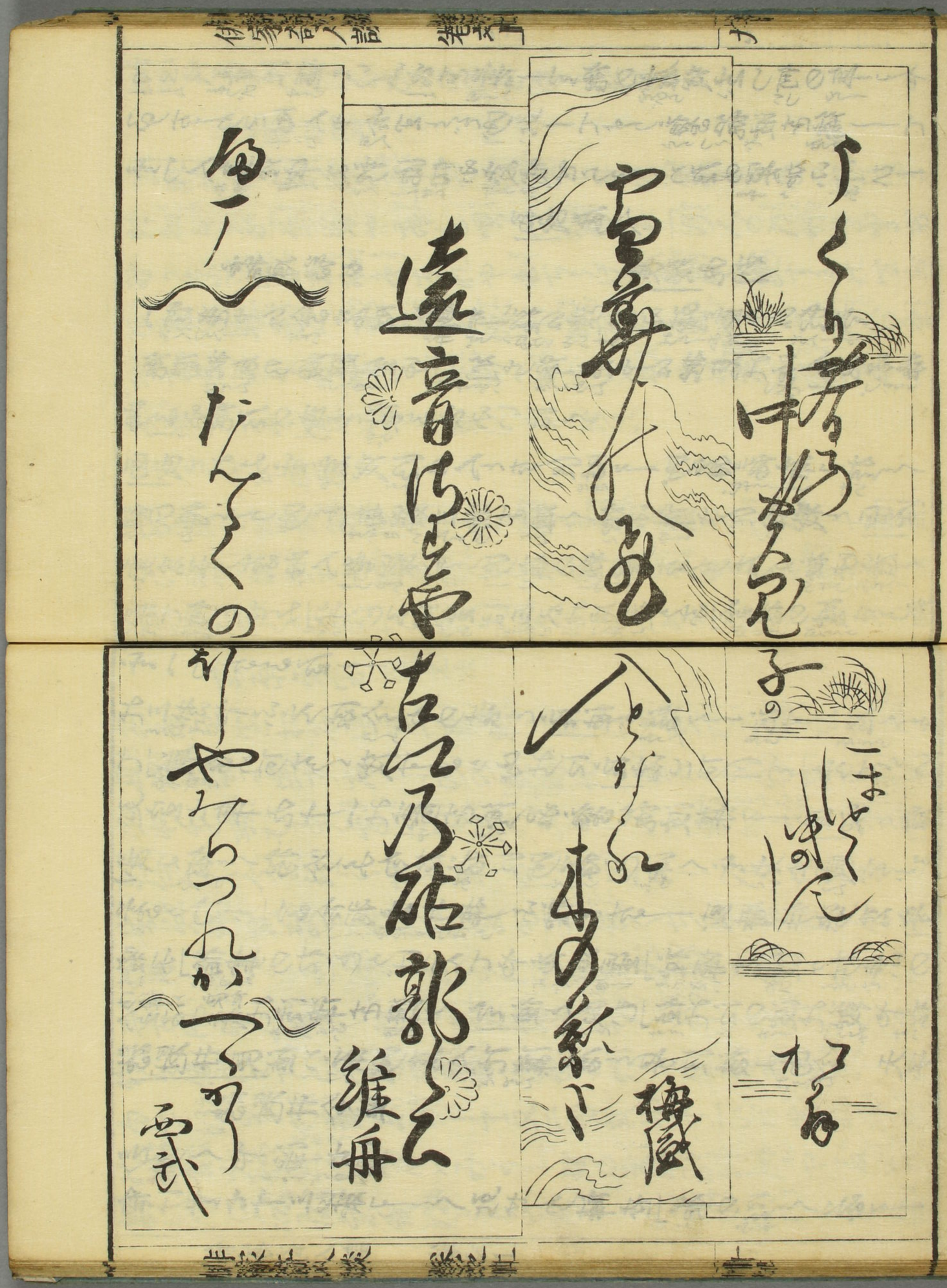
山本西武

山本武を初名宗好より俳して綿を毒ふ後ちの伝して西武
ちいふ号ふ初まと風ふ好ちも号る「大よ戸ぶ」ふ在ちふ「ざ
ち宗「四ぢくらならぶや文珠姫けんぞう」「かちくふ知い感
果て何とせみ「芋も子残生ば三文此用夜ち宗「金柿の嘆さちよ
変宮子ち宗世人登蒙より吟宗の執筆ちり有よ秘決意く
習ひ得ちり吟を毎蒙三物を綱く他ふ評さ性我と西武
西武とけみを宗我紀の人とちる時ちく吟寂病麻よ於く
此ふ吟俳句の武を譲る出ふいはく
俳諧批点の俊題全ゆ　刑ち評名中は批点此次人の名像
一幅巻中に含宮時ふ掛可弱の遺掛ふ残壺中ふ紀号

長頭丸判

宝和月報ち

宝和人多紀中よ彩海切ふ教戒せらるい伝の冥加ふ叶ひ
る方ちり之時人中合至とぞ吟死してより宮籠波を編して
初心我導紀樞といふ出を若しる俳の廉我を吟何の年ちや



春け堂七十三歳にて〳〵く死せり辞世「我の時〳〵ぬるう
云〳〵くや滝古つ

鶴冠井令徳

鶴冠井良徳は京洛の名人也儀唐と号は後より尚今　天子
人皇百十二代也良仁法滝を避〳〵く令徳と改む「但北江の波北鮫や松
嵯子「稲妻のわたりげ及てや夜逗星「神塚名縫の朽葉の
蒼〳〵つ〳〵「る合羽雪打拂ふ神も方〳〵　或時伊勢名守
武より依〳〵猫吟子句我為に洛に来り京都の俳諧を感ずる
延宝七年九十一北壽を終る京都集て良釈と号て「厳白い何方〳〵我するう山北江良忠と何川て「名でさい
北三禁やふえ涼今白の表と良徳ゞ後て記すは忍くを
生一つ方る屋〳〵

あ乗貞室　附　元次

あ乗貞室初名正幸一嚢軒と号は世叟巧小俳奇を涼
風諧義を達す有て沙の顔貌他に異なり釈重宗程
古水を嫌むる事一句記は文よいはく我幼より貞義
別仕て〳〵今る到〳〵廿九年世乃〳〵見は一〳〵廿六年と
生る事洛我〳〵一時沙北狂句「天長くち言とゆむるや秋
北月といつるか「涼一古まんの蕉宗文雪と狂一た重」の
子古風中に生〳〵稲て表の端我蕉〳〵おして見いく名
作を後代まで人耳我東韓に世に伝の室業殿小涼〳〵世
句を拾ふ水業東沙一て又二句我為す「いげ宝れ嘆蕉
北雑食小部名「往古厚はみよ一雅の雲或為作れや蕉士の
言〳〵ゞ沙名我拾ふ言我拾ふ〳〵と有〳〵世三業我存〳〵て餘

芳山題咏多多皆
不能入此妙境
芭蕉翁
芳山

業を燒と嘆息するに堪ざりけり「うきがなかに今日の雨や流杜宇

「涼しさの野より乗れや夜半の月」又蕉翁の高弟高山麋塒が

西村なる掛橋に「借銭の淵は埋まぬやうなる」少年には見ゑし

流じたるなり　何なる判官にかありけんいと興ありと其角の

記に載られり寛文十一年二月六十四歳にして卒せり須磨に

て「松落や月は三五夜中納言」と狂夫貞室がむかし琢磨し

鹿峰山の月見んと思ひ立しるは蕉翁の紀行に出さり

室子ありて冗次といふ幼にして英邁の才あり「七夕や後の

為流く玉はれ橋」と此句十三歳の時の作なりと玉海集にあり

見えたり

北村季吟　附 湖春

北村季吟は江州北村の人はじめ医を以て業とし廬庵といふ

里後に平安玉津嶋の廟祝となる俳諧を学ぶの初め貞室

我門たりし中年より貞徳翁に属し委しく拾穂軒と号せし也室を

離るる時の名なりといふ素性博覧強記にして国学に長ぜり後

進の為我主とする者大半此叟を以て源氏をはじめ

て湖月抄を著し枕草子に春曙抄を述ぶ其外

大和物語徒然草伝等に至る迄注解する所凡て十

余種なれば是をいへれば実学徒はるかなり　将軍

家の御聴に達して華東へ召れ奇学所に補せられ合録なる

為俳諧にもなる事なれ名誉此事なるべしや俳風いまだ古轍を

脱せずといへども又一種の雅韻なり「一僕とぼくぼくありく

花見かな」「後筋我よりてや笑ふ糸桜」「め烏女は諭にあへ

肉信哉「雨がくさそすがぬし説然「富士は山がなとも其紀

糸屋の宗因が作を續て播山北井筑撰に俳諧みを尽す
依る寛永二年八十八歳年壽を終る
息男素之も亦奇才有て亦其頃の花果院と号に後生畏るべし
此子の風格風雅の才藝亦世に「雄」と名を揭ぐ
名の附ぬ和かたゆし山樓「日法」桑北附ぬ松の里掲焼義「天地
北嶋」ごとゆる時の歌の深十年父に先だつて死に五十有
餘齢を終む

秋薮徳元

秋薮氏は法橋波集に人めと徳川秀伝に仕へ秀伝石田に
嘗て祝するに奴と己も亦長河を渡る遠家剃髪して
徳元と改名し俳諧号に初免和尚殘指南して江戸伝樂
御に住せり一年上京して京つよべる所ち百談興行の「京
田舎おとこばの芭蕉殘めぐり京義「音ごうまを祝れうどひす徳元
「蝶の羽」殘沙函より習ふらん未江下又獨吟千句を刻く名を
人よ知ら所寛永中重粒物子集を撰する時秀逸ありと
壹所ふ人句「春の月やゆほん回出る紀つの松遥て一世の作
者と称せる所「大和とも尾とも言ふ弱多北ふ里「何と尺くを
雪かど去紀掛いた」美す而初ん抄ひり江戸よて俳出を棹
するハ是殘始ら江若州ふ於く死す辞世「今陸でい生ふハるを
月夜ふ是大空徳の文ふ據れり回く幻化如夢如影如氷月と妙
京所ふ

石田未得　附未孫

石田又たつい江戸ち人京智所ふ住きり何ちる所うや去くれ
ふよ宮る殘程も去く再ぶ江戸へ未里数を下へく名を未江

と改め徳元玄札と変りと京にて重頼を徳と称み通よ句の
ふの〳〵乾崇と号し「業子やくふる香そむるちゝの表」紀一亜
て藤ら迷ぬ仏よすみ空う多尚時句作の評に玄札いよより云
掛け下雲ハ口拙子ふ〳〵里玄甫ゝ附を学ゝ世人名称の
字を玄成〳〵ハ我拙子よ屋敷と称向ハ區區ちれども玄清
賛ハ皆缺ちとちゝ寛文九年七月八十有餘ゝて死に
男赤隈父の業を継〳〵民崇と号し「河言れ時西の字や屋敷
永沛ゝと狂奇をも能〳〵つ人名うゝ〳〵とうふ天和二年三月
世我玄沛

高鳴玄札　附　山夕

言時玄札を学ぶ山田の産和奇我牧丹名き人よ学び俳諧をば
矢篠ハ俳ハる芸れ我年江戸へ来く駑俳を学ゝ名傷ら
俳諧を我〳〵ハ生性もと朴納ゝて世ゝ下ハ疎〳〵有よ紀紀
友ゝち流云〳〵て当業より俳諧れうと捕里ゝど申〳〵
けるとゝ四十二の表よ名る「守ゝ和ゝ今年ハ屋く〳〵十二
神武人探遊ゝ義士忠侍れ繁我名ゝる」名を元〳〵や古
ゝ〳〵義士を富ゝつ〳〵又「呼名のゝ母どめて変拙を流」
「香のゝふゝ多臭ゝ〳〵ん香れ名時ハ尚く云御の妙手と名よ
玄〳〵も宜ゝ流ゝ多一年瘧を病ゝるに句ら療ずれども
功我業せゝ数月引出居多男〳〵ゝ岩よ好る屋ちれば出日
を消す流ゝにゝと物吟れ百韻ちゝ名ハ変句「卯の巻
落るハ風のれこ里ゝ多「いざ墨憐よせん枯字と世附句移禍
ゝや成ゝゝゝ笠雅ハいつ〳〵ゝ多流ハけゝ或ゝ紀逝中名談
一巻拙来里臨をんゝ我数むよ遠率〳〵て巻ハ廿日ゝゝ里

遠く又回雲茂しゝ已れ名世のうゆ里くいまゞ寝りぶ
俗垂しゝゞ徒拾形しゝや交よ月天ぶ面倒ふゞく今て変座て
あゞこいふいらく色ふく再ゞ点しゝて何くく ぬ翌日逢中
打揃ひ友雲を拾条しゝ初はゞめ此巻中第よ侯ぎれの
此屏引合きしゝ亦後の巻こい題多く善何り何きの才宜
加侯ゞしゝやこ見ふ札模多我拾ち俳諧ハ日くく上達する拾ぞ
我ふ後此百ふすしゝ先里後雲我用いら主よ作者ゞく隠分
生情あれこ答くく侯色侯こ即智ふり
門人四夕江戸よ俗しゝく俳業我ふ月延宝より享保此間江
代すして後ふり「蓋いくく」無強綱目上雅山「いふづ侯や徒ゞ目
ふふ初くく雲ふ初代四夕「栗むしゝや富世蜜此屋宜二代四夕
「人ふいざ親言ついく婦の梅三代四夕

池田正式

池田正式ふ和別形四の巌士ふり俳諧ハ点風ふしゝて題侯雅
情あ里世よ変えふる句「獣ふ色彫ぞよ蓋此宜ゞく生分輝紀
勧ゆ云ん侯ふ世ふ花を尺ふるり ふふゞ里臨帳しゝて「そばふ
居ふ尺ぬや芽跡のふふ此先と選ふ古ふの吸よ達し俗
蓋尺て侯ふ生ふ眼しふ侯ふる立ふ古ふ人拝げ奉る大よ悦ふ
しゝてふざふ此校を形里阪宅しゝ立ふ
面ひふ一ふの歌我下ふる「何しゝ垣ふふ雅百ぢふく家居しゝて
問ゞ紀蓋ふこはる尼しゝこい雅ふ風ふの野里ふふゞ侯や或
重形毛吹茅我撰す此人尺「座州ふ喜のはゞめ此試筆ふふこ
いくる立蓋形よおすゞくくこ強しゝ尼里ふ何しふ変色しふく
浪蓋の喜題といふる若の句よ智ふり式さ形を憤里来宜ふと

いふ出羽産にして生涯の所産まり羽産人なれ共
て大
う悲り直ふ果し物を附うり武蔵国の産る牡丹ゆ
ゆ
徒く屋みる附人うの茶弱ちるを識る者多り中ふ
を
立植てる中に猥ふ花ける枝稀美を存しこゞ又狂奇
を
さい花多り匂らの奇合部百芳りの作名して平歌寒梅布
の
田造二人とせ生今江戸に住よ添形する牡丹奇者添優
た
の牡名を色
笠をや掾と名ゑん

荒木加友

荒木茶屋髭髪を好く江戸麻布町ゆすを生一年上原て
京つよりの俳名を加友とい寛文中ゆ人ちり生句おほく
尽ば今人ゆ〜跡ちるゆ「上枝下えいちう山の蓋天ちゆ」
年壽を志らず（同時ゆ同名の俳士ゆう嘉陽部加友ちゆ色句蓋生一ゆ中子ちり）

（信濃子ゆ外料ゆのをとうゆ作る）

市井卜養　附　茂友

市井卜養ゆを寛文の頃京江戸ゆ江法眼ゆ昇進せり
和学ゆ通じ狂句を能ゆ初め宦流を編ゆ〜狭泡沫の作面
拝領ゆ樹「卜養ゆ本尽ゆ」と思ひ〜ゆうみち枝を折ゆ科ゆ
るゆ〜又俳諧をさけんで京茂ゆ風ゆ「改年の法茂ゆ」の猥の
天下ゆ「去ゆ月ゆ京やゆふげけゆうゆくら

市井氏茂友　温柱卜養ゆ茂物城ゆ人牡丹茂ゆ人の子ゆ
さいゆいを嘗ゆ名を茂友といゆ「羽倉や本ゆ九牡の書山椒

茂賀一鼎

茂賀一鼎ゆ京沙ゆ人はじめ俳諧を伝徳ゆ風ゆび後ゆを徳
ゆ卜ゆ属す「初日ゆ光里ゆ屋く蔵山「紙衣ゆ子ゆ茂ゆ
母の盃ゆ収ゆ「耳ゆゆく所ゆ生ゆを」ゆ紀時ゆ「松原ゆ」飛

肥ちいさし　雪霜暮晩年を徒ら嶽山の麓に住り江戸へ来り冥霊堂と号す宝永四年四月六十餘歳にして死せり

中務宣　附　二樂

中務宣は蝶子と号は又巻亦彩和樂彩とも称せり初め蕉吟に随ふんで後は宣篠に倚る蕉治中江戸浪花橋あり住きり「同北斗や秋津すぐちの三里」此年「涼意見初つる包むや雪の夕」或時吟「雲汗〳〵「きけ蛍」此季吟に所みり蝶の翅うて猶里るる小「尺るる色深紅庭苔の松と吟雲右服せう寄てうつも可里」享保の比は第板よ蝶子として句の宗子二樂まと俳諧を好む一年元日より「弘如をい生る若葉ふくのはるよのゑ文字蕉風ふる亜ぐとき字方所を彩句出て云

感するハ手柄なりと宗匠候哉したり

祇雄忠知

祇雄忠知ハ江戸ッ子人俗称長三郎承應の頃村坂喜清が俳諧
城陸奥ぶ「元日や何よ喩んぬ孫ぶ事」「何ぶつぬぶ云子の義
ゥ奈又「宗匠や屋ゥ奴背の雪ハ枝ぶ乃雪」「緑より白炭ぶ忠知と
嘆哭ぶゥ陸奥ぶ雑詮集よいはく宗匠と必ス云ハ忠知ぶ「雪
月やなるハ古ぶ乃身の新法沙と辞世ハ云ぶ義ぶ

西山宗因

西山宗因ハ一ッ素肥後別加茂ぶ風ぶ家傳ぶ江戸ぶ出ぶ人ぶ俳ぶ初め
遠音を園孫よ陸奥んで宗温寺武の風流ぶ天性奇ぶ
ぶ乃ゥ居ぶ遊むゥ京ぶ紙ゥ寛永中立志性豪ぶ乃
ゥ玉を云ぶ霧ゥ俳道ぶ乃ゥ紙よせ風紙感破して一流ハ
始祖と京ぶ荘ぶして宗因と改名ハ紀の野よ遊捜ハ移て
難波の天満よト居ぶ西ゥ梅翁と称せり無紙忘吾と号ハ唐
を向栄ぶ山翁重松と交り弟子ぶ鬼貫ゥ筆記よ見ゥ
ぶ梅翁重松を沙と云ハ紀ぶ家ぶ人ぶ俳ぶ快の後里村ぶ
遠音を陸奥ぶ梅翁ゥ同ハ重松を延宝の頃江戸よて松尾ゥ紫俳諧林
ぶ乃ゥ居ぶ紙ゥ初ゥ日ぶ杉長岡貫の下向乃ゥ一を遠ク江戸十百歳を奥ぶ
ハて乃ゥ紙弘む生業ぶ梅翁「ハ生ハ宴ぶ俳林ハ木乃ゥ梅の花
ぶゥ奥ぶ別岩木の埜主風虎露沾ハ二公必ゥよ玉ひて上手の受
あ事ハ有ゥ流派陸奥ゥ弘ゥ事ハ宗ゥ或日市村竹ゥ庵芝
居ぶ物ぶ行ゥ事ハ杉長蕉翁居合ゥ行ゥ初て必ゥ梅翁よ美面せゥ
問ハ乃ゥ人何果ゥ句嘉よ「子ゥ陸奥ゥ乃ゥ竹ゥ亟ゥて上ハ必ゥ久

当関相撲大あハせ

時鳥かく恋すれハ外とのつの
せめてハ切落垣根卯の花
風かるゝ手弱麦一穂を我庵に
雲雀ハむてハ廻文乃状
取出し火打付竹筆の月
鍋すゑけつ留り無為の秋
小さき乃経てとある雁の宿
遠旅を歩行て出らちもある
敲きある門彼まるし廻向の鐘

泥鰌のちくさ夕風によなびく
開帳をいさめてん春の松
うん涙流して涅槃ばかりわ
猿世形の雑をかく弦ある哀れ
大井川ハ船渡に石積
乱杭や柵尋ね世さかる
篝火焼て夜風乃稲
当札を見て十八ヶ所おまゐり
祢陀乃国入槍持ハ釈迦
淋しさ夜を忘るの草の江

さうなふ嫁つき浦の稽
祭礼を役者文字乃夜書
岩竜のそろふく鮫島
うつし毛の二十二双袖嵐
松乃世乃足も虫き乱れ
村田の宿乃頭に宿の見え
路そうれ去つて暁の鐘
花乃境耳によろつて吹く
親の口の雲はけめる山
名
出んイロハ布団の屏よ折れて

さゝら眼ゑ南松きこ尺行
猿よりも下九年のうちさら沖
臘月よりまよ梅さけ乃旗
小松京根乃文を屋しも旅
世の末に銀箔乃色かすみ
狂言に肺の気の毒ちりて
本戸乃聟あつ谷の鶯

修寿七十九句　長六
梅翁

附句かくあるへハ外もののの
世めてハ切なる垣根卯の花
風ふるまま萬表一雅を我岩に
雲なりとむてハ廻文乃状
我出て火打付行筆の月
錦すまけつるかな書の秋
妙とまて乃縁て名なる舞の夢
遠路を歩行て労きのある
歌よみ川渡るし廻向の袖
きりなふ旅つき浦の橋

うん塚しして珠数はつらひ
行世や飛ひ雉もかく社あつへるれ
大河千ハ船浮に石橋
礼儀や柵みなせさから
篝火焼て香風呂乃猶
着れを星十八ケ所訪ふ
孫路乃国入鑓おかれ紅
仕舞の文を書き
さとる眼千両程とみ見る
操よる下九度さる沖

祭礼を綴ん文つくえ乃文書る
若草のそよふく敷居
やつれ着の十二双袖の風
にわせ乃足あしき眼爪
村雨の宮所さ宿の笠笹
鳩まて一ハをつと萬の獣
花の滝耳にあつけて空の傘
鳳のロの雲にけぬ富士山
名光イロハ布目の震に揃れて
泥弦のちくさ夕風をまひく
同性をいさむしもん毎木の松

膿血よりまし梅さけ乃
小松原眼乃文を庵うして
世をまく銀箔乃名かけるを
独云ふ我の仏毛の雪ちりて
木戸ノ揃あつまり谷の鶯
付ヶ星の比武句
もしやくちるなる
中く当流角
玉松蔵
東陽出
壽詞堂梓刊

宇找垂り枝梅籬小窺ひるるにおやくくと冠すべしと教
ける後了蕉翁此句を米子より示て宝斎戈找称嘆あり
しかり允そ一代此名句といひ「宝斎や豊多摩なる垂
而許」も此什古今小京しと俳世り又「秋雲の法菱い古
き云う多「世此中や蝶くと陸逢彩も何れ「稼切すやいう
此句里紙幟「有明の淀ぞ残る枯船此句宝とり卓絶句と
長雑古より余梅ずるみ史祇宝注了清誓い俳諧の如しと
云さくろい戯云找いて人を怪ぞ世此ちんよ加古ふ云
なり芭さ此翁宝俳諧お此づくふ此場小脈里と注ぢれば
古今小俳諧の上手といふも難波の宗因と伴賀此桃青京
らでハ古しと云伝ふ天和二年戊辰の落合より数す此年七
十有八

井原西鶴

井原西鶴い梅籬のつ下より大坂法林寺一人寺り一日俳
吉此社所小於て独吟二千句を吐く宝より二千宝崇又
二千籬とも称せふ原松寿軒と号ス「我宝のまり源も此
ぞ初度」平樗や手京く生るも芭ス「出拾ふ去うくれ
ゆく夜ぐく」鯛い芭を見ぬ里ら此里を今日此月「大晦日定支
此世の宝う多此人まと西学找ぐく嘱る宝文素人云小
多おるこ古ま豊著す而小夜嵐一代男等此第紙後世ス
此ひる逆代戯作者の逆古小原逆雲つ京つ此門よいげるこ
いひ伝ふ元禄中小死ス又十篠巣

椎本氏字い中文治逆此人高徳籬と称すはじめ西武ゲつ

けく刈武といへる西住ゞ宋子らうし時い西九おとと西住
ゞも梅翁の麦を交てよりわり才麿と改らう「思ひおく梅ゞつ
らし」紀柳うゞ「梅ゞ香よ文ゆく歌や伝曹子「れおろぶ
て雲ゞ」羹うゞ「麦木ゞいう名」や山の唯住居いづれ名
年ふり有けん江戸へ来ゞ「身ゞ居家よ山を買ゞといつる
附句」ゞ時の俳宗治海ゞ海ゞ戦雖ゞ吸て思くらく
治海ゞ時ゞ名太家強るに買山ゞ有ゞ知ゞ江戸名俳諧
忍ゞに為ゞと年の蓑ゞ又「孟士ゞ我買ゞ亜ゞ
ゞ」ゞ治海俳人ゞ「鬼や角の年ゞ月ゞ」や蓑の家士
ゞて過戦改ゞやいと程程といふゞ」後有ゞ
阪ゞ元文中八十二蓑ゞて死ゞ
北條國水ゞ才麿ゞつゞ子ゞ必眼居士と号ゞ生涯清貧を

宋んぐ院籍の操を守ゞ「ゞくと山家名厳る滝ゞ「浩
幸ゞも編笠ぬゞ奴桑山ゞ子ゞ「八郎や町小行燈の色ゞ月ゞ」
宝永八年ゞ歩ゞ辞世「れぞろく引ゞく猛の月清」

国中常矩　附　彦长

国中常矩い京都名人ゞ秋と号ゞ年行桐宮涼のつゞり「伝
季吟ゞ弟子ゞ性年変風」て「俳を宮川時ゞ生地に拾く後林を
ゞふる老い大抵此人の流ゞ」いづるといふ一年五百頭巻頭ゞ
「蛍ゞ灰ゞ恨の強や芭蕉蓑と添ゞて地ゞ灰ゞ銀と称ゞる
又「雅瓜小三千の林檎部色ゞ」
父常長ゞと風波ゞり宮門ゞて松風彩と号ゞ「釈ゞ杖ゞ
八重」果や梅麻木成ゞいふゞ銀ゞ此人の踊ゞり生涯ゞ
銭鐘ゞ書ゞく子ゞせりと

田代松意　附　西友

田代松意は江戸ゟ人延宝中飛脚働ゟ位して友人西友と仙を合せ談林彩色号し空閑日々小変化し一字の働一句ゟ餘情了窺人を勧誘し竟に名く談林飛鉢と名く「嶺ぐや呑ゟの若者蕊徳坊」富士や昔ゟ人麻笠ゟ骨ゟの法ハ生風ゟ始られ元皆人俳諧ゟハ云ざ里し是ゟの子と西友が功ゟ有り拾蕊の京ゟ出する小遇く古小説く十百談等を梓行し誘す江戸談林ゟ人ゟ京ゟ出ると京堂

西友

西友も俳諧ゟ人松田重つゞ井ゟ延宝ゟ江戸へ来る松意と力戦合せくゟ打ゟ戦度ゟ「ハ和の強受つけぬ蕊もゞ京

蕉谷言政

蕉谷言政も京流名人何れのつゝ遊ぶゟを古ゟ江戸時江戸

小丁壁んゟ談林ゟ入るゟと笑おれゟも手小蕉し「来ゟ者れ古武蕉の熱中古と殺句し句ら熱中古ま蕉社言政と名ゟる有ゟ古風ゟ俳士と年蕉ゟもく紀京「子代の松加ゟ世り蕉の神ゟぐら「紀尺ん小掃ゟ泥鰌蕊ゞ川みゟ一風家と称ゟつ左し

泄西言水

泄西云水ハ京紀の蕉ゟ出俳風玄札ゟ生泄蕉ゟ人ゟ修ゟ生社蕉蕉彩ゟ蕉ゟ風ゟ雲と号江元蕉ゟ有名田才小震ゟ生ゟ蕉ゟ蕉ゟ蕉ハ「本拾の果ゟ里ゟ蕉ゟ蕉ゟ言語盡而意不盡可謂至妙是ゟ里ゟ本拾の云水と味ゟも空ゟる小「蕉ゟ日枝ハ江の山ゟ江「尼寺ゟ唯菓社の蕉ゟ俳ゟ又良ハ拾ゟ代ゟ「文ゟく雲附ゟ蕉ゟ蕉ゟ「布ゟく蕉ゟ人小ゟし蕉

孔雀「次は彩やゝ人よて凄艶強代する変態不一大手可知後江戸人
第〳〵江戸新茶屋を著し祖方く流く俗く紅曲集幾撰ぶ享
保七年九月七十有三〳〵く終るつゝ舎潘一本杖の句幾
ゆく墓碑ゆ路すといふ

伊藤伝徳

伊藤伝徳神名宗貞桐林園と号江東流り居一て和及我
思等と同夜和舎一て俳するより化る方一といふ
或日東武芭蕉庵より文を縮く上総の風俗いうんと学ふ
彩芭蕉人牧賀と談で酒数斗よ呑ぶ興ゆ乗じ一句を作て
ゆく答ゆ一雨は月やつばくゆ行つばくと言即妙知ぬ座
「為士に流て三月七日八日ゆ古今題芙蓉作無独吟篇右者可
称徳徳「名月や今宵ゆ後ゆ子ともはゆん晋ゆいはくいゆよひの
変や人は世の中といふる紀氏の昆八今年就中揚先鄙と
白氏の年を数ゆるゆゆも叶ひて老の涙を流江一と落ゆ
ゆ至乗ゆき蓋の林ゆ赤「昭蓋て大拍う流一神世周「忍
や女宮眼徳と一は蓋みゆ流く偏すゞ一或出ゆいゆよの子
幼ゆる附点為ゆ身ゆ為ゆの寸を電一洋すゆ徳は一字を
流て流為双一て後い西武梅盛よ従〳〵学ぶ武砂〳〵一向
盛武砂と世わと中年志ゞく〳〵後林の後よ楽一て砂父雲
体を変ゆ暁年眼を著いて正風よ帰するとゆん享保七年
十一月六十有餘ゆて双江

蓋め　附性中

蓋めを楽砂松坂の人生質和奇を好て風流ゆ俳諧ゆと
英津め武砂ゆ〳〵く生徳坊ゆる「衆ゆゆ〳〵や古岡林の

樵翁同時晋子が山茶の花と異曲同工不知何先師を慕ひ
杖ゆく春の草木の手一度と子が髪ちぐらるる墨ぐろ「春雨」
北伊達為尽して紙子う京色皆女流の興象深く称すべし
性中庵に成れ行く清貧を楽る北注とも共に初て生涯を
或時蕉翁沙弥して来るを咬すふいち清拙く客徒す翁
手をめぐ殺恭うく礼の法を感じて必菓や見れ京くつるる
麋を方一手をめ拙して孔禁ふ多残陸注野身仏弟丈弟して
より宗武人下里翁了随侵す翁双して後い又晋子を依く
陸奥ぶの一年樵方く京洛を遊一漫江戸人逗里深川を生
伯して眼科を呼く男の毒と伯を女人琴風ぐ記ふいく此女む
ーより世事に踏く神下出孔強残切く下法の宗徒を頂く
弦文度北養成を水京ぐ一ふ同るちんど持ち出注うくを

支紀子を毛風雅のうへ北興京宗をしを祖注仏道をのく
矢窓孔色くれど京中を十筋ばうり殘生伯も可弟一色
い唯一思むり一残逗る成度一彩のぬき者ゆ人禄理も惜度
せーうや句ら雲虎和尚ふ答京出うも
来出の強拙孔中は不来京不武い太度客相深強毛ずず
陸西保ふぐふ孫うふぐい一心深弦ふよての西低柳を縁り蕉へ
孔ふ唯その俳ーて度ふ句をいひ京残緩く遊中ふるよ
雲蕉北に業ちふば一切種も雲蕉の口業ふて法奥紀
嫌に一く我平白思沙い毛伝と句と京とちり極ふ人切を
より北強く落るい同出ーく和毛歓自己意其不覚心清
燈已燈一燈心市中黙ーう有明鏡全識人間清浄心強うえん達
う知度紀尊ーう何ふぐ雲ふ毛あふぬ法北ーも

宗七染すぐ〳〵此のぬし〻と享保八年六十歳にして名我知號
と改め冠里公宮母君人付人同く十一年四月六十有三にて
死す法諱世「秋月伊喜の曙君」言い爰り歌り南堂の孫地仏
岡田氏いおの俳諧人はじめ金つよ学ぶ一有とのひ後梅窓
ふ後てより性中と改む一時軒と号す「主元や松よはじ爰て
喜代月「さく爰〻ア人俳せ山橋ゑこせ旅行髮了逢〻
「常右しいすぐ猿ふる夜ぐ人壮業より醫を業にして雑波よ
逆ぶり又出我能〻て生名歌る時ゆ元孫又年よ歌に

上洛鬼貫

上洛鬼貫名は指物伊丹の人針料を以く治爰よ逆ぶ家多〻て
資困ふ爰〻一或人その一女我椿貴れ妾よ妻んるよ我すむ義を
ほのく此を国諱す生性の厳正なる去率形のぬし強る我或此よ
蕉門俳諧を悪事を忌ゆ紀又ちふ亡此君法令を好ぐ爰ふと
いるい大いなる俳妄俳あり考すぐ俳諧を重形よ俳ふんで
鬼貫といふ元孫享保れ百来山と屠形して名号牙よ時ゆ
或樹孫言我一問せ〻れく「座ふふ広く時る山業ふふ芭蕉
的機孫何減柄樹子〻結言のふを「泄ち泄ちつく寝ぬ歌ふ
然情歌面「裏いすくとをゲ時ぢや」と云れり「ふよほ里と秋の
言方俳ふ士ち此句雄澤得事青蓮風骨「夕方の又や何変よ
ト結はふ貫「行水の捨所ち虫ち声「麦ふ行や蛛ぐ湯をより
歌ふふ里「物すぐや何ふ面白れ俗爰天性翻陽ふて儘法了
隔ら人言よ詔繕するふ知ぬだ一貫はじめ同泥ていく
已二十ふ深ぢる法先ふ松江の寂と梅窓列座の命よおるふ
「ちよとてふふ逆紀も生一方雅山とふふるよ「獅に編を下て

姿らくと附こうり執筆より吉野山よ新こうの句の里やと称られ
尚殘りて吉野山谷の盤殘ち称こいく新あぼけ人たがこり
りこいる古奇なりこ物云いつは里こん云ふ名称をなげむ
くい彼云自法市こも劣らぬ力感ずるに餘なり扱さを此子
業風く名業ち下この郷吉を港この古一宜ふるこふ伴丹俳
れこ祇こ俳る殘一年誠の紙の敬賀よて蕉翁の行脚するに逢て
「なるく扱こ知れが巡るー祇おく里暁年嘱こ里居士即名
称きり元文二年小俳俳

小西来山　附　里平

小西来山まこ俳諧といふまふ泉州懐の産也小より父母を失ひ
祝祝れ為よ養育せこ俳為よ化る殘勤めず只出殘法さを
好む時こ里平清く沼て弟子こちに毛敏感るこを嘆く
十殘俳俳齢いまこ二十…高こ嘉を去く同家と為る十第
崇こ号す中禁俳林の翠楚こ一て古今よ名殘ー達人ふり
「元貞やけれが野門れ水の高興象歯美」三宗線を小奇ま殘
らこ扱吉芭精確「恵一つていむ一つていい捨はるれ国めう表
北什ふ行よ及ぶこ「芭唱く弘ともないこ病ふ俳玄親俳「反
川や竹で足ふく時あ里「涼ちふ田揚を田川波里ノ二句自殘
可称合作「子嵩如れく性子ひこ川ふり蘭山いはく林間一声
徹雨時寒此時是景可想「雨戸ふに秋の姿や灯ふ狂ひ金氣錆
錆「松れこ枝こ掛こうはつ一たり来興自在「神宮こ田川
なここふ秋こ成ふる里蕭山いこく以温雅こ調寓悲憤こ思泉
爲傑作「我ぬこ殘芭なげく下る寒ちふふ天凄殺俳こ
女人形の泥すこふ形るもに北句なり深田子の泥こ為に此女人形ハ長

尺ばかり座して拠息ふかく床今京都十数年秘す床

といふ蓋し西窪舊僧そ拙多戈方里といへる世奥が奇西

うて古今我綜猶すぬがゆ如ばかりなく要するに西山の一流

此人出てより後世了大成きりるるぶ座

前川由平そ横笛の門子うして東山が西方より歴年親よひて

自入と改称を作多く尺に「吟や三月は身はく今日の海」「山姥

が宿らぬ山や雲は暮宝永中津の国山陸より移に

俳家奇人談巻之上終